

日越通訳における明示化

—通訳の方向別及び方式別の比較—

チャン・ティ・ミー

(東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程)

This study aims to analyze explicitation strategies in Japanese-Vietnamese interpretation from the point of view of directions and modes of interpreting. The informants in this study were eight interpreters who had both more than five years of experience in consecutive interpreting, and previous experience in simultaneous interpreting. The explicitation strategies identified in the data were classified into six types: 1) Restoration of omissions; 2) Subdivision of sentences; 3) Use of conjunctions, adverbs; 4) Addition of information; 5) Explicitation of referents; 6) Explicitation of proper nouns. The differences in the tendency of usage of explicitation strategies can be explained by the features of the Japanese and Vietnamese languages, differences between the two cultures, and modes of interpreting.

1. はじめに

一般的に通訳業務とは話し手のメッセージをある言語から別の言語へ変換し、聞き手に伝達することだとされている。しかし、何を言語で表し、何を表さないかは言語文化により異なるため、言語化されている情報のみを訳しても理解に支障を来すことがある(ベイカー&サルダーニャ 2013: 71)。そこで、通訳者は起点言語(Source Language, SL)で暗示的な情報を目標言語(Target Language, TL)で明示的に表す、即ち「明示化(Explicitation)」という技法を頻繁に用いている。訳出プロセスにおける明示化の重要性はBlum-Kulka(1986)、Séguinot(1988)、Baker(1993)、Øverås(1998)、Klaudy(1998)、花岡(1999, 2000, 2001)、Pápai(2004)、劉(2010)などにより明らかにされている。しかし、これまでの研究では、英語を対象とした明示化の研究が中心であり、ベトナム語を扱う研究は皆無といってよい状況にある。各言語とその背景にある文化はそれぞれ異なるので、明示化の普遍性を裏付けるために、英語以外の言語間の訳出プロセスにおいて明示化がどのように使用されているかを調査する必要がある。

TRAN Thi My, "Explicitation in Japanese-Vietnamese Interpretation: Comparison of Directions and Modes of Interpreting," *Interpreting and Translation Studies*, No.16, 2016. Pages 43-62. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

本研究では、日越通訳における明示化の使用実態を調査するために、二つの側面から着目する。一つは和文越訳と越文和訳の両面を考慮した、通訳の方向である。もう一つは逐次通訳と同時通訳の両面を考慮した、通訳の方式である。これら方向別及び方式別の二軸の比較で明示化の使用傾向に相違があるかどうかを検証し、相違がある場合にその要因を掘り下げる。

2. 先行研究

明示化の概念を初めて提唱したのは Vinay & Darbelnet (1958/1995) である。彼らは明示化を「SL では文脈や状況から明らかであるために暗示的に留められているものを、TL で明示的に表す文体上の翻訳技法 (藤濤訳 2013 : 71)」と定義している。Vinay & Darbelnet (1958/1995) 以降に行われた明示化研究は、翻訳テキストの特性としての明示化、ストラテジーとしての明示化、そして翻訳テキストの特性とストラテジーの両方としての明示化を扱う研究の3つに大別される。

2.1 翻訳テキストの特性としての明示化を扱う研究

翻訳テキストの特性としての明示化についての研究は Blum-Kulka (1986)、Séguinot (1988)、Baker (1993)、Øverås (1998) が挙げられる。

明示化について最初に体系的な研究を行ったのは Blum-Kulka (1986) である。Blum-Kulka は談話レベルの明示化について談話分析の概念と用語を用いて調査し、「明示化仮説 (The explicitation hypothesis)」を提唱している。明示化仮説とは「SL から TL に訳される際、言語及びテキストの体系間の差異に起因する増加分とは関係なく、結束性の明示化が観察されるという想定 (藤濤訳 2013 : 220)」である。

Séguinot (1988) は英文仏訳及び仏文英訳の2つのコーパスを用いて調査した結果、いずれの場合においてもトピックとコメントの関係の改善 (improved topic-comment links)、焦点の改善 (improved focus)、つなぎ言葉の追加及び SL の従属的な情報の主要な或いは等位の構造への格上げ、以上の4つが確認されたことから TL にはより高レベルの明示化が見られたと結論付けた (Séguinot 1988 : 109)。この研究では、どちらの訳出方向においても明示化の度合いが上がるということは、それが2つの言語の構造や文体の相違で説明できるのではなく、テキスト編集の方針によるものとされた (Klaudy 1998 : 82)。

Baker (1993) は翻訳テキストには翻訳プロセスにおける特定の言語の組み合わせに影響されない普遍的な特性があるとしている。それは明示化、簡素化及び正常化であるという (Baker 1993 : 243)。

Øverås (1998) は英語とノルウェー語の双方向パラレルコーパスから取り出した文学翻訳コーパスを用いて調査した結果、いずれの TL においても明示化が暗示化より多く観察されたと報告している。また、明示化は SL と TL の文体的嗜好、言語体系の相違、文化的な翻訳規範などにも起因する可能性を示唆している。

2.2 ストラテジーとしての明示化を扱う研究

明示化をストラテジーとして扱う研究は Chesterman (1997)、Klaudy (1998)、花岡 (1999, 2000, 2001) 及び Molina & Albir (2002) が挙げられる。Chesterman (1997) と Molina & Albir (2002) は明示化をさらに細かく分類せず、翻訳ストラテジーの一つとして扱っているのに対して、Klaudy (1998) と花岡 (1999, 2000, 2001) は明示化の下位分類を試みている。

Chesterman (1997) では、明示化が文化フィルター、追加・削除、対人的変更などとともに語用論的ストラテジーに分類されている。

Molina & Albir (2002) では、明示化が適合、補償、縮小化などとともに一般的翻訳ストラテジーの一つとして扱われている。

Klaudy (1998、藤濤訳 2013 : 74) は次のように明示化を4つのカテゴリーに分類している。

義務的明示化 (Obligatory explicitation) : 二言語間の統語論的・意味論的な構造上の相違から要求されるもの。

任意的明示化 (Optional explicitations) : テキスト構築の方略と言語による文体的好みの相違から要求されるもの。

語用論的明示化 (Pragmatic explicitations) : 文化の違いから要求されるもの。

翻訳に内在する明示化 (Translation-inherent explicitations) : 翻訳プロセスの性質により生じるもの。

花岡 (1999, 2000, 2001) における明示化の分類をまとめると、明示化は「省略の復元」、「強調」、「情報の追加」、「代名詞による指示と語彙の反復」、「固有名」、「文化固有の事象の明示化」、「実用的明示化」、「文字情報の明示化」、「意図せぬ明示化」という9つのカテゴリーに分類されている。その中の「固有名」はさらに「直訳+説明」、「簡略化」、「隠喩の説明」に分けられている。

2.3 翻訳テキストの特性とストラテジーの両方としての明示化を扱う研究

翻訳テキストの特性としての明示化と翻訳ストラテジーとしての明示化を区別して分析した研究は Pápai (2004) 及び劉 (2010) が挙げられる。

Pápai (2004) はパラレルコーパス及び比較コーパスを用いて調査を行った。パラレルコーパスは英語原文及びそのハンガリー語訳文からなり、比較コーパスはハンガリー語に翻訳されたテキスト及びハンガリー語オリジナルテキストから構築されている。パラレルコーパスにおいて観察された明示化ストラテジーを「論理・視覚関係 (logical-visual relations)」、「語彙・文法 (lexico-grammatical)」、「統語 I (syntactic I)」、「統語 II (syntactic II)」、「テキストと言語外レベル (textual & extra-linguistic level)」という5つのカテゴリーに分けた上で、句読点の多用、省略構文の補足、接続詞の追加など16種類に分類している。また、句読点、接続詞などの出現頻度及び Type/Token Ratio を明示化の指標とし、比較コーパスにおいて、翻訳されたテキストの方が高い明

示性を示すことを明らかにした。

劉(2010)もパラレルコーパス及び比較コーパスを用いて調査を行った。中国語原文とその和訳文からなるパラレルコーパスにおいて見られた明示化ストラテジーを「指示対象の明示化」、「連結関係の強化」、「強調」、「含意の表出」、「背景知識の説明」及び「構文要素の補足」という6つのカテゴリーに分類している。さらに、日本語に翻訳されたテキスト及び日本語オリジナルテキストからなる比較コーパスにおいて「文の長さ」、「Type/Token Ratio」及び「接続(助)詞の頻度」を明示化の指標として分析した。その結果、3つの指標においても翻訳テキストの方がオリジナルテキストより高い数値を示すことを明らかにした。

以上、先行研究における明示化の捉え方及び分類を概観してきた。Vinay & Darbelnet (1958/1995)、Blum-Kulka (1986)、Séguinot (1988)、Baker (1993)、Øverås (1998)、Klaudy (1998)、花岡(1999, 2001)、Pápai (2004)、劉(2010)は研究対象が翻訳であり、花岡(2000)では通訳のうち、放送通訳のデータが扱われたが、全体としてデータの種類が限られていると言えよう。

明示化の下位分類を試みた先行研究に関して、Klaudy (1998)は明示化を適用しなくても文法的に正しい文が可能かどうかを判断基準として「義務的明示化」と「任意的明示化」を区別したが、「語用論的明示化」と「任意的明示化」の違い、「翻訳に内在する明示化」の判断基準が不明である。花岡(1999, 2000, 2001)、Pápai (2004)、劉(2010)の分類はKlaudy (1998)より具体的であり、明示化を定量的に分析する場合に適用できるであろう。しかし、花岡と劉が提示した「強調」は明示化というより明示化を使用することにより得られる効果だと思われる。花岡の「文字情報の明示化」及びPápaiの「句読点の多用」は、前者が放送通訳に特有の明示化であり、後者が文字という視覚的な要素を使用する翻訳の特徴があるからこそ観察された明示化であるため、通訳プロセスにおける明示化の調査に当てはめられない。

本研究では、明示化をストラテジーとして捉え、以下のように定義する。

明示化とは二つの言語体系の相違、文化の違い、話し手と聞き手の背景知識の差異を埋め、円滑な情報伝達を実現させるため、SLにおいて文脈や状況から明らかであるために暗示的に留められている情報をTLにおいて言語化したり、SLになかった情報をTLにおいて追加して訳出したりするストラテジーである。

日越通訳における明示化の使用実態を調査するために、8名の通訳者のデータを収録し、上記の明示化ストラテジーの定義を用い、量的な分析と質的な分析の両方を行う。

3. 研究目的

本研究では、次の2つの設問を設け、解明することを目的とする。

- (1) 和文越訳及び越文和訳の両方向において明示化ストラテジーが見られるか。もし見られるならば、どのような形で現れるか。
- (2) 通訳の方向別及び方式別の比較で明示化ストラテジーの使用傾向に相違がある

か。もし相違があるならば、その相違の原因は何であるか。

4. 研究方法

4.1 スピーチの動画及び研究協力者の情報

実際の通訳現場では、逐次通訳と同時通訳の両方式が多く用いられるのはスピーチの通訳の場合である。従って、日越通訳における明示化を通訳の方向及び方式の側面から分析・考察することを目的とした本研究では、起点スピーチにベトナム語のスピーチの動画と日本語のスピーチの動画を用い、研究協力者に同じ動画に対して逐次通訳と同時通訳をしてもらうことにした。

スピーチの動画の選定に当たり、日本語のスピーチとベトナム語のスピーチが実際に同じ場面でなされ、難易度が同様に、高音質かつ高画質という条件を設けた。採択した元の動画にはスピーチ以外の部分もあるため、動画編集ソフトを用い、スピーチのみを抜き出した。また、実験の手順に慣れないことや心構えができていないことなどが研究協力者のパフォーマンスに悪影響を与える可能性を減らすため、本番用の動画以外にリハーサル用の動画も用意した。その情報は以下の表1のようになる。

表1. スピーチの動画の情報

使用目的別	言語	長さ	日付・場面・発表者	発話文数
リハーサル用 ¹⁾	日本語	2分17秒	平成25年12月15日 日・ベトナム共同記者発表 安倍晋三総理大臣	13
	ベトナム語	4分09秒	平成25年12月15日 日・ベトナム共同記者発表 グエン・タン・ズン首相	20
本番用 ²⁾	日本語	3分11秒	平成26年3月18日 日・ベトナム共同記者発表 安倍晋三総理大臣	23
	ベトナム語	4分06秒	平成26年3月18日 日・ベトナム共同記者発表 チュオン・タン・サン国家主席	22

研究協力者に対して、日越逐次通訳歴5年以上かつ同時通訳の経験ありという2つの条件を設けた。第一言語が日本語の通訳者にも協力してもらうことが望ましい。しかし、筆者が調べた限り、両方の条件を満たした日本語母語話者は数える程しかない。その結果、今回の研究協力者は全員第一言語がベトナム語の通訳者となった。8名の研究協力者の情報は以下の表2のようになる。

表 2. 研究協力者情報

収録順番	逐次通訳 経験 (年)	同時通訳 経験 (回)	日本在住経験 (累計年月)	在住地域
1	9	5	6年0ヶ月	関東地方
2	5	3	3年6ヶ月	関東地方
3	16	2	1年0ヶ月	関東地方
4	10	4	5年2ヶ月	関東地方
5	5	2	9年2ヶ月	中部地方
6	9	3	4年0ヶ月	関西地方
7	5	1	4年3ヶ月	九州地方
8	5	2	4年8ヶ月	九州地方

4.2 実験手順

本研究では、日越通訳における明示化を通訳の方向及び方式の側面から解明するために、研究協力者に同じ動画の逐次通訳と同時通訳をしてもらうことにした。しかし、連続して実験を行うとスピーチの内容を覚えてしまい、通常と同じパフォーマンスではなくなる可能性が考えられる。その可能性を最小限に抑えるため、以下のような手順に沿って実験を行った。

関東地方在住の研究協力者4名に対して1回目に逐次通訳の実験を、1ヶ月以上経った後の2回目に同時通訳の実験を行った。中部地方、関西地方及び九州地方在住の研究協力者4名に対しては、関東地方在住の通訳者と同様に2回の実験を1ヶ月挟んで行うことが日程的に困難であったため、同日に逐次通訳と同時通訳の実験を行った。スピーチ内容を覚えてしまう可能性を減らすため、同時通訳の実験を先に行ってから、実験に関係のない雑談をしつつ1時間以上休憩をとった後、逐次通訳の実験を行った。

いずれの場合も、最初に研究協力者にフェース・シートに記入してもらい、研究協力者についての同意書に署名してもらった。次に、収録中の操作について説明した。逐次通訳の実験では、スピーチの1発話文の後、動画を一時停止し、研究協力者がその発話文を訳出し終えてから次の発話文を再生するという順序で進めた。同時通訳の実験では、収録中に動画を一時停止することはなく、再生したら研究協力者が同時通訳をするという進め方であった。質疑応答を通じてそれぞれの手続きを研究協力者が十分に理解したと確認できてから、リハーサルを始めた。リハーサル終了後、研究協力者が準備を整えてから本番に入った。最後に、フォローアップ調査として、録音されていることについての意識、自分のパフォーマンスがいつも通りであるかどうかの評価などについて書いてもらった。

2回の実験を1ヶ月挟んで行う研究協力者の4名と同日に行う研究協力者の4名との間に明らかな違いがあるかを確認するために、対応のないt-検定を行った結果、明示化の出現割合には有意差が見られなかった ($p < .05$)。

4.3 文字化の方法

2015年4月から7月にかけて実験を行い、研究協力者1名あたり、和文越訳の逐次通訳1セット、和文越訳の同時通訳1セット、越文和訳の逐次通訳1セット、越文和訳の同時通訳1セットを収録でき、8名で計32セットのデータが得られた。データの計32セットを宇佐美(2011)の基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ、以下、BTSJ)に従い、文字化した。筆者による1次文字化に対して、日本語のトランスクリプトを日本語母語話者に、ベトナム語のトランスクリプトをベトナム語母語話者に確認してもらい、2次チェックを行った。

データに見られた明示化を分類してから、分類の信頼性を確認するために、計32セットのうちの3セットを用い、セカンドコーダーを立てた。評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa)³⁾の測定を行った結果、 κ は0.87376、0.88969、0.90036である。 κ がどの値以上であれば信頼性があるかの明確な基準はないが、直感的判断が伴う難しいものでは0.7以上とされている(西郡2002)。セカンドコーダーを立てた3セットの κ はいずれも0.7以上であり、分類の信頼性が確認できたと言えよう。

5. データ分析の結果及び考察

花岡(1999、2000、2001)及び劉(2010)の分類を参考に、実験で収集したデータを分析した結果、以下の「省略の復元」、「文の小分け」、「接続詞、副詞の使用」、「情報の追加」、「指示対象の明示化」、「固有名詞の明示化」という6つのカテゴリーに明示化が見られた。

以下では、各カテゴリーに対し、実験で収集したデータの中から和文越訳の例と越文和訳の例を順に示す。丸括弧内に示されているのは越文和訳の直訳である。下線が引いてある所は当該の明示化が使用された箇所である。部分的な誤訳は分析対象として扱っていない。実例の次に出現割合と頻度を示す。割合は聞き取り不能と完全に誤訳だと判断される訳出文を除いた当該セットのTLの総発話文数に占めるものである。「省略の復元」、「接続詞、副詞の使用」、「情報の追加」、「指示対象の明示化」、「固有名詞の明示化」が1つの文に2度出現した場合、2度とカウントしている。「文の小分け」に関しては、SLの1つの文がTLで複数の文に訳出されても、SLのどの部分がTLで小分けされたか特定できない場合は「文の小分け」に分類しない。また、SLのどの部分がTLで小分けされたか特定できても、同じことを繰り返すだけだと判断する場合は「文の小分け」に分類しない。

①省略の復元

「省略の復元」とはSLで省略されている文の構成要素をTLで復元して訳出するストラテジーである。

言語使用の習慣などにより、話し手は主語、目的語や動詞などの構文要素を頻繁に省略することがある。通訳者はSLとTLとの言語体系の相違、文化の違いを考慮し、

場面、文脈などを手掛かりとして、推測し、省略された要素を復元している。言語化されていない要素を復元することにより、TLにおいて非文法的或いは非文体的な構文を回避することができ、聞き手の理解の負担を軽減する効果があると考えられる。

花岡 (2000) では、SL で省略されている動詞を復元した訳出を「省略の復元」の例として挙げている。Pápai (2004) における 16 種類の明示化ストラテジーのうち、「filling elliptical structures (省略構文の補足)」が入っている。また、劉 (2010) において主語及び動詞が TL で補足された例が提示されている。「省略の復元」ストラテジーは今回の実験で収集したデータにおいても見られている。次の例 (1) と例 (2) は SL で省略されている主語を TL で復元した例である。

例 (1) :

[SL] そして、明日は大阪で経済界等々と交流をする予定と伺っております。

[TL] À, đồng thời thì ngày mai ông cũng có chương trình đến để giao lưu với doanh nghiệp ở tại Osaka. (えー、同時に、明日は先様は大阪で企業との交流のスケジュールがあります。)

例 (2) :

[SL] Vấn đề thứ 2 là tiếp tục triển khai có hiệu quả các thỏa thuận hợp tác quan trọng. (第二の事項は、重要な協力合意を引き続き効果的に実施します。)

[TL] えーと、その一、2 番目の内容は、えーと、そう、双方が今後、えーと、重要な、あの一、合意を効果的に展開することについて、えーと、ごう、一致しました。

協力者 8 名の訳出における「省略の復元」の出現割合と頻度を下表にまとめる。

表 3. 「省略の復元」の出現割合 (頻度)

研究協力者	逐次通訳		同時通訳	
	和文越訳	越文和訳	和文越訳	越文和訳
1	7.14% (7)	0.00% (0)	4.48% (3)	0.00% (0)
2	12.33% (9)	0.00% (0)	13.64% (6)	0.00% (0)
3	10.53% (12)	0.00% (0)	16.18% (11)	0.00% (0)
4	11.84% (9)	0.00% (0)	5.88% (3)	0.00% (0)
5	15.38% (12)	0.00% (0)	14.49% (10)	0.00% (0)
6	13.64% (9)	0.00% (0)	11.48% (7)	0.00% (0)
7	12.50% (7)	2.04% (1)	11.54% (6)	0.00% (0)
8	10.39% (8)	0.00% (0)	13.16% (5)	0.00% (0)

「省略の復元」の使用傾向に和文越訳と越文和訳とでは、そして逐次通訳と同時通訳とでは有意な違いがあるかどうかを検討するため、表 3 を用い、対応のある t-検定を行った。その結果を以下の表 4 にまとめる。

表 4. 「省略の復元」の通訳方向別・方式別の出現割合比較の t- 検定結果

	逐次通訳方向別	同時通訳方向別	和文越訳方式別	越文和訳方式別
p	0.0000035	0.0001	0.78	0.35

和文越訳と越文和訳の使用傾向を比較した結果、通訳方式に関わらず、「省略の復元」の出現割合に有意差が見られた ($p < .05$)。また、越文和訳より和文越訳で多く用いられている。越文和訳の通訳方向では 8 名のうち、1 名の訳出にだけ見られ、出現頻度は 1 回のみである。それが例 (2) であるが、復元されたのは主語である。一方、和文越訳の方向では研究協力者 8 名全員に見られ、出現頻度の合計は 124 である。そのうちの 122 箇所が主語の復元であった。同一箇所に対して 8 名全員が SL で省略された主語を TL で復元しているケースも見られている。

日本語とベトナム語との違いの中で大きいのは主語の省略可能性である。主語が話し手自身であったり、話し相手であったりする場合、日本語では文の表面からしばしば省略されるのに対して、ベトナム語では原則的に表出する。和文越訳において省略された主語の復元は言語体系の相違に起因し、必然的に起きるものと思われる。しかし、その効果は非文法的・非文体的な構文の回避、聞き手の理解負担の軽減だけではない。ベトナム語では公的行事において発言する場合や目上の人と話す場合など主語を言わないと相手に失礼となり、人間関係にまで影響を及ぼしかねない。従って、和文越訳における主語の復元に人間関係を円滑にする効果もあると考えられる。

②文の小分け

「文の小分け」とは SL の 1 つの文を TL で複数の文に分けて訳出する戦略である。

Pápai (2004) は 16 種類の明示化戦略の一つとして「文の小分け」を提示している。また、Klaudy & Károly (2005) は明示化戦略について説明する際、SL の一つの文を TL において 2 つ或いは幾つかの文に分ける場合を例にしている (Klaudy & Károly 2005 : 15)。

SL の 1 つの文が例 (3) の TL では 2 つの文に、例 (4) の TL では 4 つの文に分けられている。

例 (3) :

[SL] サン主席は東京だけではなくて、初日には茨城県において農業施設を視察をされました。

[TL]

(1) Ngài Trương Tấn Sang thì không chỉ, trong chuyến công du này, không chỉ dừng lại ở Tokyo mà còn đi những nơi khác nữa. (チュオン・タン・サン様は今回の公式訪問で、東京だけではなくて、のみならず、他のところもお越しになります。)

(2) Cụ thể là ngày đầu tiên thì ngài tới Ibaraki và đi thăm cơ sở nông nghiệp ở địa phương. (具体的には、初日には茨城にお越しになり、そして、現地の農業施設を訪問されました。)

例 (4) :

[SL] Vấn đề thứ 4 là 2 bên đã đạt được những bước tiến mới trong việc thúc đẩy hợp tác toàn diện trong lĩnh vực nông nghiệp, phát triển nguồn nhân lực, y tế với các bộ ngành của 2 bên đã ký kết các thỏa thuận hợp tác mà chúng ta cùng vừa chứng kiến trong dịp này. (第四の事項は、今回先ほど我々の立ち合いのもとで双方の各省庁が各協力覚書を署名したことにより、双方は農業、人材育成、医療などの分野における包括的な協力を推進することにおいて新たな進展を達成しました。)

[TL]

(1) で、また、4、え、点目としては、えー、ま、いろんな分野に関しましてベトナムと日本のりょう、協力連携関係は新しい発展を迎えることができました。

(2) 具体的には人材育成とか農業それから医療という分野において協力関係が発展してきました。

(3) えー、このようなプロジェクトに関して各関連官庁、両国の各関連官庁が具体的には合意書を結んでありますし、えー、ま、既に進めているというところであります。

(4) えー、ま、これに関しましては我々も先ほど、ま、えーと、調印式、えー、そうですね、目撃したところではございます。

協力者 8 名の訳出における「文の小分け」の出現割合と頻度を下表にまとめる。

表 5. 「文の小分け」の出現割合 (頻度)

研究協力者	逐次通訳		同時通訳	
	和文越訳	越文和訳	和文越訳	越文和訳
1	3.06% (3)	3.23% (4)	7.46% (5)	4.17% (2)
2	1.37% (1)	5.66% (3)	4.55% (2)	9.38% (3)
3	2.63% (3)	6.10% (5)	8.82% (6)	5.56% (2)
4	2.63% (2)	1.69% (1)	11.76% (6)	2.04% (1)
5	2.56% (2)	0.00% (0)	8.70% (6)	4.55% (2)
6	0.00% (0)	7.14% (3)	4.92% (3)	7.14% (2)
7	8.93% (5)	12.24% (6)	7.69% (4)	6.67% (2)
8	6.49% (5)	13.16% (5)	2.63% (1)	6.90% (2)

「文の小分け」の使用傾向に和文越訳と越文和訳とでは、そして逐次通訳と同時通訳とでは有意な違いがあるかどうかを検討するため、表 5 を用い、対応のある t-検定を行った。その結果を以下の表 6 にまとめる。

表 6. 「文の小分け」の通訳方向別・方式別の出現割合比較の t-検定結果

	逐次通訳方向別	同時通訳方向別	和文越訳方式別	越文和訳方式別
p	0.07	0.49	0.047	0.8

和文越訳の方向において、逐次通訳と同時通訳の使用傾向を比較した結果、「文の小分け」の出現割合に有意差が見られた ($p<.05$)。また、逐次通訳より同時通訳で頻繁に出現している。同時通訳において研究協力者 8 名全員の訳出に現れた。それに対して、逐次通訳においては、8 名のうち、1 名が全く使用しなかった。SL の日本語は文がそれほど長くなく、従属節も少なかったため、逐次通訳の際は各文を小分けしなくても分かりやすい訳出を産出できる。しかし、同時通訳の際は同時進行性を維持するために、「文の小分け」は不可欠である。こういった通訳方式の特徴が「文の小分け」の和文越訳の通訳方式別の比較における相違を生じさせたものと考えられる。以下の例 (5) は同じ日本語の発話文に対する研究協力者 6 による逐次通訳と同時通訳の訳出である。逐次通訳の際は「文の小分け」が採用されなかったが、同時通訳の際は SL の 1 文が TL では 2 文になっている。他の研究協力者にも同様の傾向が見られている。

例 (5) :

[SL] まず、安倍晋三内閣総理大臣からご発表いただきまして、続きまして、サン国家主席からご発表をいただきます。

[逐次通訳の TL]

À, trước hết là xin mời thủ tướng Abe có đôi lời phát biểu và sau đó là xin mời lời phát biểu của chủ tịch nước Trương Tấn Sang. (えー、まずは安部総理大臣より一言ご発表をお願い申し上げ、そして、続きましてはチュオン・タン・サン国家主席からご発表をお願い申し上げます。)

[同時通訳の TL]

(1) Và đầu tiên là bài phát biểu của thủ tướng Abe. (そして、まずは安部総理大臣のご発表でございます。)

(2) Và sau đó sẽ là bài phát biểu của thủ, chủ tịch nước Trương Tấn Sang. (そして、続きましてはチュオン・タン・サン首、国家主席のご発表でございます。)

一方、越文和訳の方向において逐次通訳と同時通訳の「文の小分け」の使用傾向を比較した結果、出現割合に有意差が見られなかった ($p<.05$)。SL における文が長い場合、その文の構造に沿って通訳すると、不自然な TL になりうるだけでなく、理解を妨げることも考えられる (劉 2010 : 129)。SL のベトナム語は例 (4) のように長い発話文が多くあるため、逐次通訳においても「文の小分け」を採用しないと、不自然かつ難解な日本語になる可能性がある。越文和訳の通訳方式別の比較において「文の小分け」の使用傾向に有意差が見られなかったのは、SL のベトナム語が長く、同時通訳

のみならず、逐次通訳の場合も多用されているためだと考えられる。

③接続詞、副詞の使用

「接続詞、副詞の使用」とは SL にはない接続詞、副詞を TL で追加して訳出するストラテジーである。

Séguinot (1988)、Pápai (2004) 及び劉 (2010) は、SL に比べ TL には接続詞、特定の副詞 (つなぎ言葉) の面でより高レベルの明示化が見られたと結論付けた点で共通している。訳出プロセスにおいて接続詞、副詞を追加して訳出することにより、論理展開、因果関係がはっきり明示され、文章の統一性、一貫性、そして結束性を高める効果があると考えられる。

例 (6) と例 (7) では、SL になかった「それゆえに」、「また」という接続詞が TL で追加されている。

例 (6) :

[SL] 我が国はベトナムへの巡視船艇供与に向け近く調査団を派遣いたします。

[TL] Chính vì vậy, chúng tôi, à, về việc cung cấp tàu tuần tra cho Việt Nam thì chúng tôi sẽ sớm gửi đoàn khảo sát sang. (それゆえにこそ、我々、えー、ベトナムへの巡視船艇供与に向けては我々は近く調査団を派遣いたします。)

例 (7) :

[SL] Vấn đề thứ 2 là tiếp tục triển khai có hiệu quả các thỏa thuận hợp tác quan trọng. (第二の事項は、重要な協力合意を引き続き効果的に実施します。)

[TL] また、第、あ、2 番目は重要な協力合意を効果的に行うことです。

協力者 8 名の訳出における「接続詞、副詞の使用」の出現割合と頻度を下表にまとめる。

表 7. 「接続詞、副詞の使用」の出現割合 (頻度)

研究協力者	逐次通訳		同時通訳	
	和文越訳	越文和訳	和文越訳	越文和訳
1	28.57% (28)	29.03% (36)	23.88% (16)	37.50% (18)
2	34.25% (25)	22.64% (12)	25.00% (11)	18.75% (6)
3	21.93% (25)	17.07% (14)	29.41% (20)	13.89% (5)
4	21.05% (16)	16.95% (10)	19.61% (10)	40.82% (20)
5	12.82% (10)	18.33% (11)	18.84% (13)	18.81% (8)
6	25.67% (17)	11.90% (5)	34.43% (21)	17.86% (5)
7	17.86% (10)	10.20% (5)	23.08% (12)	3.33% (1)
8	15.58% (12)	10.53% (4)	26.32% (10)	27.59% (8)

「接続詞、副詞の使用」の使用傾向に和文越訳と越文和訳とでは、そして逐次通訳と同時通訳とでは有意な違いがあるかどうかを検討するため、表7を用い、対応のあるt-検定を行った。その結果を以下の表8にまとめる。

表8. 「接続詞、副詞の使用」の通訳方向別・方式別の出現割合比較のt-検定結果

	逐次通訳方向別	同時通訳方向別	和文越訳方式別	越文和訳方式別
p	0.051	0.61	0.29	0.21

「接続詞、副詞の使用」の通訳方向別・方式別の使用傾向を比較した結果、和文越訳と越文和訳の両方向、そして逐次通訳と同時通訳の両方式における出現割合に有意差が見られなかった ($p<.05$)。

④情報の追加

「情報の追加」とはSLにはない情報をTLで追加して訳出するストラテジーである。

ここで言う「情報」とは、その言語自体に関する知識や前後の文脈から推測されるものではなく、通訳者がその通訳内容のトピックに対して事前に持ち合わせている特定の知識に基づき、追加されるものを示す。

例(8) :

[SL] 2006年10月総理就任後間もないわたくしはベトナムとの間で両国の関係を戦略的パートナーシップへと高めていくことに合意いたしました。

[TL] Và, vào tháng 10 năm 2006, không bao lâu sau khi mà tôi chính thức nhậm chức thì tôi cũng đã ký kết một cái biên bản đồng ý xây dựng mối quan hệ hợp tác chiến lược giữa Việt Nam và Nhật Bản. (そして、2006年10月に、私が正式に就任した後間もない私はベトナムと日本との間の戦略的協力関係の構築の合意の覚書を1通署名しました。)

例(9) :

[SL] Vấn đề thứ 2 là tiếp tục triển khai có hiệu quả các thỏa thuận hợp tác quan trọng. (第二の事項は、重要な協力合意を引き続き効果的に実施します。)

[TL] で、また、あの一、現在にも実現しているところの協力事業を効率的に展開するということについても、えー、お互い合意にいたしま、至りました。

協力者8名の訳出における「情報の追加」の出現割合と頻度を下表にまとめる。

表 9. 「情報の追加」の出現割合 (頻度)

研究協力者	逐次通訳		同時通訳	
	和文越訳	越文和訳	和文越訳	越文和訳
1	17.35% (17)	11.29% (14)	13.43% (9)	6.25% (3)
2	19.18% (14)	9.43% (5)	2.27% (1)	9.38% (3)
3	20.18% (23)	15.85% (13)	2.94% (2)	11.11% (4)
4	22.37% (17)	28.81% (17)	15.69% (8)	16.33% (8)
5	6.41% (5)	8.33% (5)	2.90% (2)	6.82% (3)
6	12.12% (8)	7.14% (3)	16.39% (10)	10.71% (3)
7	17.86% (10)	14.29% (7)	11.54% (6)	13.33% (4)
8	19.48% (15)	10.53% (4)	10.53% (4)	3.45% (1)

「情報の追加」の使用傾向に和文越訳と越文和訳とでは、そして逐次通訳と同時通訳とでは有意な違いがあるかどうかを検討するため、表 9 を用い、対応のある t-検定を行った。その結果を以下の表 10 にまとめる。

表 10. 「情報の追加」の通訳方向別・方式別の出現割合比較の t-検定結果

	逐次通訳方向別	同時通訳方向別	和文越訳方式別	越文和訳方式別
p	0.1	0.93	0.02	0.08

和文越訳の方向において逐次通訳と同時通訳の使用傾向を比較した結果、「情報の追加」の出現割合に有意差が見られた ($p < .05$)。同時通訳・逐次通訳のいずれにおいても 8 名全員の訳出に現れたが、頻度は全体として逐次通訳の方が高かった。原因は、同時通訳では「情報の追加」を多用すると、話し手の発言に遅れてしまい、追いつけなくなり、同時進行性が保てなくなることにあると考えられる。

一方、越文和訳の方向において逐次通訳と同時通訳の「情報の追加」の使用傾向を比較した結果、出現割合に有意差が見られなかった ($p < .05$)。情報を追加して訳出することは聞き手への情報提供になり、聞き手にとって背景のより明確な話となる効果がある。しかし、非母語への訳出の際、表現を選定するために多くの時間と労力が必要とされる。このため、非母語の日本語への通訳において「情報の追加」の出現頻度は逐次通訳も同時通訳もそれほど高くなく、大差がないと考えられる。

⑤指示対象の明示化

「指示対象の明示化」とは SL の代名詞、普通名詞の指示対象を TL で説明を加えて明確にして訳出するストラテジーである。

「指示対象の明示化」による伝達効果は聞き手にとっての情報処理の負担を減らす効果及び発言内容を強調する効果の 2 つが考えられる。

例 (10) では SL の「両国」が TL で「ベトナム・日本」に、例 (11) では SL の「我々」が TL で「私と首相、晋三安倍首相」になっているように、指示対象が明確化されている。

例 (10) :

[SL] 2006年10月総理就任後間もないわたくしはベトナムとの間で両国の関係を戦略的パートナーシップへと高めていくことに合意いたしました。

[TL] Vào tháng 10 năm 2006, ngay sau khi nhậm chức thì tôi đã cùng với Việt Nam, à, trao đổi, ề, các ý kiến chung để nâng cao tầm quan hệ của Việt Nam - Nhật Bản lên quan hệ chiến lược. (2006年10月に就任後私はすぐベトナムと、えー、ベトナム・日本の関係を戦略的関係へ高めるために共通の意見を交換しました。)

例 (11) :

[SL] Chúng tôi đã nhất trí nâng cấp khuôn khổ quan hệ 2 nước lên thành đối tác chiến lược sâu rộng vì hòa bình và phồn vinh ở châu Á. (我々は両国関係の枠組みをアジアにおける平和と繁栄のための深く幅広い戦略パートナーシップへ格上げすることで一致しました。)

[TL] えー、私と首相、あの一、晋三安倍首相が、あの一、両国の協力関係は、あの一、えー、パートナーシップの関係を、あの一、開発させることを合意しました。

協力者 8 名の訳出における「指示対象の明示化」の出現割合と頻度を下表にまとめる。

表 11. 「指示対象の明示化」の出現割合 (頻度)

研究協力者	逐次通訳		同時通訳	
	和文越訳	越文和訳	和文越訳	越文和訳
1	11.22% (11)	8.06% (10)	14.93% (10)	6.25% (3)
2	4.11% (3)	9.43% (5)	9.09% (4)	9.38% (3)
3	7.89% (9)	10.98% (9)	7.35% (5)	8.33% (3)
4	11.84% (9)	16.95% (10)	13.73% (7)	4.08% (2)
5	16.67% (13)	1.67% (1)	11.59% (8)	0.00% (0)
6	3.03% (2)	11.90% (5)	4.92% (3)	14.29% (4)
7	8.93% (5)	4.08% (2)	9.62% (5)	10.00% (3)
8	14.29% (11)	13.16% (5)	5.26% (2)	3.45% (1)

「指示対象の明示化」の使用傾向に和文越訳と越文和訳とでは、そして逐次通訳と同時通訳とでは有意な違いがあるかどうかを検討するため、表 11 を用い、対応のある t-検定を行った。その結果を以下の表 12 にまとめる。

表 12. 「指示対象の明示化」の通訳方向別・方式別の出現割合比較の t-検定結果

	逐次通訳方向別	同時通訳方向別	和文越訳方式別	越文和訳方式別
p	0.94	0.33	0.91	0.28

「指示対象の明示化」の通訳方向別・方式別の使用傾向を比較した結果、和文越訳と越文和訳の両方向、そして逐次通訳と同時通訳の両方式における出現割合に有意差が見られなかった ($p < .05$)。

⑥ 固有名詞の明示化

「固有名詞の明示化」とは SL の固有名詞を TL で直訳した上で種類、資格や立場などの説明を加えたり、略式の名称を正式な名称に換えたり訳出するストラテジーである。

例 (12) では、SL においてファーストネームの「サン」のみが話されているのに、フルネームの「チュオン・タン・サン」に訳出されている。例 (13) では、SL の「アジア」に「地域」が加えられている。

例 (12) :

[SL] まず、安倍晋三内閣総理大臣からご発表いただきまして、続きまして、サン国家主席からご発表をいただきます。

[TL] Trước tiên thì chúng tôi xin trân trọng kính mời thủ tướng Shinzo Abe sẽ phát biểu và tiếp theo xin được mời chủ tịch nước Trương Tấn Sang. (まずは我々は安倍晋三総理大臣のご発表を謹んでお願い申し上げ、そして、続きまして、チュオン・タン・サン国家主席にお願い申し上げます。)

例 (13) :

[SL] Chúng tôi đã nhất trí nâng cấp khuôn khổ quan hệ 2 nước lên thành đối tác chiến lược sâu rộng vì hòa bình và phồn vinh ở châu Á. (我々は両国関係の枠組みをアジアにおける平和と繁栄のための深く幅広い戦略パートナーシップへ格上げすることで一致しました。)

[TL] で、我々は、あの一、アジア地域の平和それから繁栄のために、えー、今、りょう、今の両国の関係を広範にわたる、えー、戦略て、戦略的な協力関係に格上げ、えー、するということに合意いたしました。

協力者 8 名の訳出における「固有名詞の明示化」の出現割合と頻度を下表にまとめる。

表 13. 「固有名詞の明示化」の出現割合（頻度）

研究協力者	逐次通訳		同時通訳	
	和文越訳	越文和訳	和文越訳	越文和訳
1	10.20% (10)	4.03% (5)	11.94% (8)	0.00% (0)
2	9.59% (7)	0.00% (0)	9.09% (4)	0.00% (0)
3	7.89% (9)	0.00% (0)	11.76% (8)	0.00% (0)
4	5.26% (4)	0.00% (0)	11.76% (6)	0.00% (0)
5	11.54% (9)	0.00% (0)	10.14% (7)	0.00% (0)
6	7.58% (5)	0.00% (0)	4.92% (3)	0.00% (0)
7	3.57% (2)	0.00% (0)	3.85% (2)	0.00% (0)
8	9.09% (7)	0.00% (0)	2.63% (1)	0.00% (0)

「固有名詞の明示化」の使用傾向に和文越訳と越文和訳とでは、そして逐次通訳と同時通訳とでは有意な違いがあるかどうかを検討するため、表 13 を用い、対応のある t-検定を行った。その結果を以下の表 14 にまとめる。

表 14. 「固有名詞の明示化」の通訳方向別・方式別の出現割合比較の t-検定結果

	逐次通訳方向別	同時通訳方向別	和文越訳方式別	越文和訳方式別
p	0.00007	0.0005	0.91	0.35

和文越訳と越文和訳の使用傾向を比較した結果、「固有名詞の明示化」は逐次通訳においても同時通訳においても出現割合に有意差が見られた ($p < .05$)。また、出現頻度は通訳方式に関わらず、越文和訳より和文越訳の方が多い。具体的には、和文越訳における出現頻度の合計が 92 であるのに対し、越文和訳では 5 回しか用いられなかった。

頻出するのは例 (12) のように、SL の日本語ではベトナム国家主席についてファーストネームの「サン」のみが使われているが、TL のベトナム語では 8 名全員がフルネームの「チュオン・タン・サン」に訳出するケースである。逐次通訳における「固有名詞の明示化」の出現頻度の合計は 53 回であるが、そのうち 30 回がこのケースである。同時通訳においても同様の傾向が見られ、「固有名詞の明示化」の出現頻度の合計は 39 回であるが、そのうち 26 回がこのケースである。

日本では、首脳会談のような場面において外国の要人のことをファーストネームに役職名を付けて呼んでも失礼に当たらない。しかし、ベトナムでは、政府の国家主席や首相などのことは役職名とともにフルネームを用いて呼ぶのが一般的である。この文化の違いにより「固有名詞の明示化」の方向別の使用傾向に相違が生じたと考えられる。

6. まとめ

本研究では、日越通訳における明示化を通訳の方向及び方式から分析・考察した。まずは、条件を満たした8名の通訳者を研究協力者とし、実験にてデータを収集し、文字化資料を作成した。次に、データに見られる明示化を分類し、自身で操作的に定義した後、通訳の方向別及び方式別の比較で明示化の使用傾向に相違があるかを検討するため、t-検定を行った。最後に、なぜ明示化の使用傾向に有意差が見られたのかを探るために考察を行った。以下では、本研究の分析・考察を研究設問に答える形でまとめる。

- (1) 和文越訳及び越文和訳の両方向において明示化ストラテジーが見られるか。もし見られるならば、どのような形で現れるか。

実験で収集したデータを分析した結果、「省略の復元」、「文の小分け」、「接続詞、副詞の使用」、「情報の追加」、「指示対象の明示化」、「固有名詞の明示化」という6つのカテゴリーに明示化が見られた。

明示化を対象とした先行研究は主に英語ともう一つの言語のペアを扱う研究が中心であるが、明示化の普遍性を裏付けるために、英語以外の言語のペアについても研究を進めるべきである。日本語とベトナム語のペアを対象とした本研究のデータにおいても明示化が採用されていることが明らかになった点で、明示化の普遍性がより説得的なものとなったと言えよう。

- (2) 通訳の方向別及び方式別の比較で明示化の使用傾向に相違があるか。もし相違があるならば、その相違の原因は何であるか。

逐次通訳において和文越訳と越文和訳の明示化の使用傾向を比較した結果、「省略の復元」、「固有名詞の明示化」の出現割合に有意差が見られた ($p<.05$)。

一方、同時通訳において和文越訳と越文和訳の明示化の使用傾向を比較した結果、「省略の復元」、「固有名詞の明示化」の出現割合に有意差が見られた ($p<.05$)。

和文越訳の通訳方向において逐次通訳と同時通訳の明示化の使用傾向を比較した結果、「文の小分け」、「情報の追加」の出現割合に有意差が見られた ($p<.05$)。

また、越文和訳の通訳方向において逐次通訳と同時通訳の明示化の使用傾向を比較した結果、出現割合に有意差が見られた明示化はなかった ($p<.05$)。

明示化の使用傾向における相違の要因は言語体系の相違、文化の違い及び通訳方式の特徴の3つであると推察される。通訳方式に関わらず、「省略の復元」が越文和訳より和文越訳で多く用いられているのは日本語とベトナム語との主語の省略可能性に関する違いに起因していると考えられる。通訳方式に関わらず、「固有名詞の明示化」の出現頻度が越文和訳より和文越訳の方が高い要因は呼称に関する文化の違いであると考えられる。和文越訳において「文の小分け」が同時通訳でより頻繁に出現しているのと、「情報の追加」の出現頻度が逐次通訳でより高いのは同時通訳の同時進行性から生じていると考えられる。

他方で、3つの課題が残されている。1つ目は通訳プロセスの特性としての明示化の研究である。今後の研究においては、Pápai (2004) 及び劉 (2010) に倣い、明示性の指標を設定し、ベトナム語から日本語に通訳されたデータと通訳されていない日本語オリジナルデータから比較コーパスを構築し、明示性を検証していく。2つ目は本研究のデータにおいて見られた6種類以外の明示化ストラテジーの研究である。今回はスピーチの通訳のデータを扱ったが、対話の通訳プロセスにおいて異なる明示化ストラテジーが採用される可能性がある。3つ目の課題は明示化の効果の明確化である。明示化の効果として伝達効果、通訳業務の補助効果及び人間関係を円滑化する効果の3つが考えられるが、緻密な分析と考察が必要不可欠である。

.....
【著者紹介】

チャン・ティ・ミー (TRAN Thi My)。東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程修了、同後期課程在学中。

.....

【註】

- 1) 日・ベトナム首脳会談、署名式及び共同記者発表 - 平成 25 年 12 月 15 日、<<http://nettv.gov-online.go.jp/prg/prg9028.html>>2014 年 12 月 25 日アクセス。
- 2) 日・ベトナム首脳会談等 - 平成 26 年 3 月 18 日、<<http://nettv.gov-online.go.jp/prg/prg9512.html?nt=1>>2014 年 12 月 25 日アクセス。
- 3) Cohen's Kappa は次式で得られる。

$$\kappa = (Po - Pc) / (1 - Pc)$$
 Po : 観察された単純一致率
 Pc : 偶然一致する確率

【引用文献】

- Baker, M. (1993). *Corpus Linguistics and Translation Studies: Implications and Applications*. In M. Baker et al. (Eds.), *Text and Technology: In Honor of John Sinclair* (pp. 233-250). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Blum-Kulka, S. (1986). Shifts of Cohesion and coherence in translation. In J. House & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlingual and Intercultural Communication: Discourse and Cognition in Translation and Second Language Acquisition Studies* (pp. 17-35). Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation: The Spread of Ideas in Translation Theory*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Klaudy, K. (1998). Explication. In M. Baker (Ed.), *Routledge Encyclopedia of Translation*

- Studies* (pp. 80-84). London & New York: Routledge.
- Klaudy, K & Károly, K. (2005). Implication in translation: An empirical justification of operational asymmetry in translation. *Across Languages and Cultures*, 6 (1): 13-28.
- Molina, L. & Albir, A. H. (2002). Translation techniques revisited: A dynamic and functionalist approach. *Meta*, 47 (4): 498-512.
- Olohan, M. & Baker, M. (2000). Reporting *that* in translated English: Evidence for subconscious processes of explicitation?. *Across Languages and Cultures*, 1 (2): 141-158.
- Øverås, L. (1998). In search of the third code: An investigation of norms in literary translation. *Meta*, 43 (4): 571-588.
- Pápai, V. (2004). Explicitation. A universal of translated text?. In A. Mauranen & P. Kujamäki (Eds.), *Translation universals: Do they exist?* (pp.143-164). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Séguinot, C. (1988). Pragmatics and the Explicitation Hypothesis. *TTR: traduction, terminologie, rédaction*, 1 (2): 106-113.
- Vinay, J-P & Darbelnet, J. ([1958]1995). *Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation* (J.C. Sager & M.-J. Hamel, Trans.). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 宇佐美まゆみ (2011) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011年改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金 基盤研究B (2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- 鳥飼玖美子 (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』、ミネルヴァ書房
- 西郡仁朗 (2002) 「自然会話データ「偶然の初対面」の公開～その方法論について～」『人文学報』330号、東京都立大学人文学部 pp.1-18. (再録：2003『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C (2) (課題番号：13680351) (研究代表者：宇佐美まゆみ)、研究成果報告書 pp.87-98.)
- 花岡修 (1999) “An Exploratory Study of Explicitation Strategies in News Translation”『東京都立航空工業高等専門学校研究紀要』第36号 pp.107-119.
- 花岡修 (2000) 「放送通訳における明示化の方略」『通訳研究』第0号 (日本通訳学会設立記念特別号) pp.69-85.
- 花岡修 (2001) 「ニューズウィーク日本版に見られる明示化」『通訳研究』第1号 pp.36-52.
- ベイカー, M.&サルダーニャ, G. (2013) 『翻訳研究のキーワード』(藤濤文子 監修・編訳) 研究社
- 劉明綱 (2010) 「コーパスに見る中日翻訳における「明示化」の特徴—雑誌の時事報道記事を中心に—」『通訳研究』第10号 pp.121-140.